

## 第3回高石市の幼児教育のあり方検討委員会会議録

1. 平成21年9月24日（木）午後6時から高石市役所別館1階会議室113において、第3回高石市の幼児教育のあり方検討委員会を開催した。

2. 出席委員は、次のとおりである。（13名）

委員長：大方 美香                      委員長職務代理者：畠中 宗一  
委員：野澤 正子                      委員：舛谷 隆康                      委員：山崎 雅雄  
委員：松岡 勇二                      委員：片木 滋郎                      委員：川村 千春  
委員：森 由貴子                      委員：伊藤 鼓代                      委員：金谷 美千代  
委員：青木 正子                      委員：古川 康江

3. 関係者の出席は、次のとおりである。（2名）

清高幼稚園                      山本理事長                      村田園長

4. 事務局出席者は、次のとおりである。（12名）

教育長：佐野 慶子                      教育部長：園田 勝                      教育部理事：関口 三郎  
保健福祉部長：福村 寿之                      教育部次長兼教育総務課長：野村 泰博  
保健福祉部次長兼子育て支援課長：浅井 淳一  
教育指導課長：細越 浩嗣                      教育指導課長代理：澤 理佳  
子育て支援課長代理：細川 栄二                      教育指導課主幹：清水 寛之  
教育総務課長代理：西川 浩二                      教育総務課総務係長：杉本 忠史

○司会（西川） ただいまから第3回高石市の幼児教育のあり方検討委員会を開催いたします。

本日の委員会の出席委員は、委員14名中、長澤委員を除く13名であります。

また、清高幼稚園から理事長様、園長様にご出席をいただいております。

なお、保護者様は日程調整がつかず、ご出席いただいておりますので、よろしくお願いいたします。

続いて、本日の会議の傍聴にお越しになられた方に入室していただきます。

（傍聴者入室）

○司会（西川） それでは、委員長、よろしくお願いいたします。

○大方委員長 そうでしたら、ただいまから第3回高石市の幼児教育のあり方検討委員会を開催いたします。

本日は、ご多忙中にもかかわらず、皆様、傍聴に来ていただきまして、ありがとうございました。

また、清高幼稚園の理事長様、園長様には、お忙しい中、ご出席いただきまして、心より感謝、御礼申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

では、早速でございますが、私立幼稚園としての運営方針や特色ということで、理事長様のほうからでも、園長先生も、どちらでも結構なんですけれども、ご意見等お聞かせいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。座ったままで結構です。

○清高幼稚園理事長 こんなマイクをちょうだいしまして恐れ入ります。私は学校法人慈光学園の理事長としてなりましてから2年余りなんですけれども、それまでは園長をしておりました。園長の期間が16年、17年になりますかね。その前から幼稚園に勤めまして、この慈光学園に勤めたときが、昭和の54年4月、慈光学園に赴任してまいりました。その前身は公立の中学校に勤めておまして、縁があって入ったわけです。それから既に30年余りを経過しております。

それから、この慈光学園が、昭和44年に幼稚園が認可されました。学校法人は43年秋なんですけれども、昭和44年4月に一番大もとになりますたけしろ幼稚園というものを開園いたしまして、たけしろ幼稚園が10年目のときに、この幼稚園に入ったわけです。ですから、慈光学園を造りましたときの設立の発起人、前任者の学校法人慈光学園の理事長なんですけれども、この理事長のもとでいろんな勉強をさせていただきました。

それまでは、公立というものと、それからまず私立というものの大きな違いがあります。公立から来て私立を勉強するのには、かなりの努力が要ったわけです。かと言いましても、公立

の場合は、所謂、教壇に立った学校の先生でした。それから、幼稚園に入りましてからは、いわゆる分野がないといいますが、理事長のもとで、また園長のもとでいろんなものを学ばなければいけないと。そして、幼稚園の運営から、学校法人の運営から、それから経営、並びに園長の仕事等もかなりさせていただいたつもりです。

そういう状況にありながら理事長、園長のもとでいろんな勉強をさせていただいたことは先ほど言いましたとおりなんですけれども、私立学校といいますと、やはり設立時の建学の精神、自分はこういう学校法人をつくりたいという理想のもとにつくられたものだと。そして、その中で慈光学園はもともと山本学園という個人名がついていたんですけれども、やはり私立といえども、これは公の学校なんだという意味から、前理事長が慈光学園という名前をつけました。

慈光学園というのは、読んで字のごとくなんです、幼い子どもたちを慈しみ、機会を与えてやりたい、そういう基本方針で、いわゆるこれが建学の精神なんですね。そして、幼稚園を経営していく段階で、ああでもない、こうでもない、と、試行錯誤しながらなんです、ようやく40年を経過しました。その中の30年が私の幼稚園での人生なんです。

その中で、保護者のニーズというもの、あるいは保護者に信頼されるにはどうしたらいいのかということはいろいろ考えながら運営されてきたわけなんです、私もそれを引き継ぎまして、保護者のニーズは何だろうか、それから保護者の信頼を得るにはどうしたらいいだろうかということを考えながらやってきて、平成15年、この高石市の民営化の話を受けまして、これを引き受けすることになりまして、時が経過してきたわけなんです。この間も高石市の皆様、市民の皆様にかなり信頼を得たのではなかろうかな、それからニーズも、ある程度、満足していただけるのではないだろうかというふうなものをいつも考えておりました。

幸いに、それに應えるかのごとく、保護者のニーズといいますが、結果は、結局、私学には校区がありませんので、あそこがいいということになれば、あるいはニーズがあるということになれば、それに応募してくるわけなんですけれども、園児数もだんだんとふえまして、最初は、公立のときには、清高幼稚園のときには二十数名でしたか、それが幼稚園ができてから、今では300近くになっております。

それだけの子どもたち、それから保護者の方々の信頼を得た、このままいってくればいいなというふうに思うんですけれども、先日来、この資料を見せていただきまして、皆様方お持ちということですので、ページ等おわかりかなと思うんですけれども、この中を見ますと、いわゆる0歳から5歳の園児の子どもたちの推計というものがどんどんと下がってきております。したがって、私どもがもっともっと頑張らなければいけないという気持ちを持っているん

ですけれども、子どもがいなければいかんともしがたい。何とか私たちの頑張ってきたこのいい教育を受けさせてやりたいけれども、子どもがいなければということで、途中からバスを持ち、それからニーズに合わせて、どんどんとバスの交通のほうも広がってきております。したがって、遠方からやってきている園児もたくさんいるということになるわけです。ほとんどが高石市の市民の子どもたちです。

こういった子どもたちの将来、健やかに育っていく、健やかなる成長を見守りながら頑張ってもらいたいと思います。これが私どもの信念といいますか、頑張ってきた状況で、これからも同じように頑張っていきたいというふうに思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたしますと思います。

それから先ほど、子どもが減っているということから考えますと、将来的には私どもの幼稚園も減るだろうということは十分予測されることです。したがって、現在の公立幼稚園がありまして、私学の方も2園ですか、あるわけですが、それぞれが経営するためにはどうすればいいのかということを考えますと、割合、この地域は幼稚園が近くにございます。泉北ニュータウンは各地区に1つずつあって、今では競争の一途をたどっているというのが現状なんですけれども、そうならんとも限らない。そうすると、いろんなところで要らない知識だの、要らないことも考えなければいけないかなと思ってみたりするわけですが、本来の教育を考えますと、本当に幼児教育に没頭していきたいというのが本来の私たちの責任であり、使命であるというふうに考えております。そういう意味からも、皆様方のご支援、ご協力いただければありがたいなというふうに思っております。

ちょっと長く話し過ぎたかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

○大方委員長 ありがとうございます。

続きまして、園長先生にお尋ねいたします。

幼児教育における課題、園の課題や問題点と今後の幼児教育の考えについて等、またお話しいただきたいと思います。

○清高幼稚園園長 清高幼稚園の園長、村田純子でございます。よろしくお願いいたします。

園の特色ということでお話を伺いしておりましたので、少しお話しさせていただきたいと思います。

当園は、先ほど理事長のほうからお話がありましたけれども、公立の清高幼稚園の民営化園で、平成15年4月1日に開園いたしました。

初年度は公立から残った子ども7名を含む101名でスタートいたしました。今年度、現在は、

年少が5クラス123名、年中4クラス106名、年長3クラス99名、合計12クラス328名が在籍しております。このうちバス通園児221名です。

保育時間は、徒歩通園児は午前9時20分から午後2時まで、月曜から金曜まで同じ時間です。

それから、昼食は学園の本部があります堺市南区竹城台の調理室でつくった給食をいただいています。安全な旬の食材を中心に、薄味の味つけをしております。冷凍のコロッケとかシューマイとかフライ物とかなどの半完成品や化学調味料を使わずに、すべて昆布とカツオでだしをとってつくる手づくりの給食です。担任がそれぞれの子どもたちの好き嫌いや適量を把握して配ぜんいたします。苦手なものも少しずつ量をふやしていけるように、楽しい雰囲気の中で食事ができるよう配慮しております。この頃の若いお母様方は余りおつくりにならないひじきですとか大豆ですとか野菜の煮物なども子どもたちは大好きで、あと、ご飯は2割ほど麦が入っておりますけれども、これも嫌がらず、本当によく食べてくれます。月曜から金曜までの完全給食ですが、月2回程度、お弁当日があります。

園生活の中で子どもたちにはたくさんの経験をさせたいと思っております。丈夫な体づくりにも励んでいます。通常保育のほかに、専門の講師を招いて、体操、英語、音楽活動に取り組んでおります。また、園外に出て、スイミングも行っております。

別途費用がかかりますけれども、保育終了後にサッカー、体操、知育、造形、ピアノ、英語の課外活動があります。正課の活動で興味を持った子どもたちなど66名が参加しております。卒業後も引き続き活動している子、または、よその幼稚園を卒業した子も活動しておりまして、課外活動がある日は夕方遅くまで随分にぎやかにしております。

毎日、延長保育を行っております。保育時間を挟んで、午前7時30分から午後6時30分までお預かりしています。お仕事をなさっているお母様方のご要望で始めたものですが、その日にお母様が何らかご用事がある子ですとかお母様の体調がすぐれない子ですとか、それから先ほど申しました課外活動に参加するために残る子またはお友達と申し合わせて一緒に遊ぶために延長保育で残る子など、さまざまな利用の形がございます。会員制で、今年度186名が登録しております。毎日20名から30名の子どもたちが遅くまで残っております。縦割り保育になりますので、大きな子どもが小さな子どもたちの面倒を見たり、小さい子どもたちは大きな子どもたちのまねをして、いろいろなことに挑戦したりして、刺激し合って育ち合うよい環境になっております。毎日2名から3名がバスを利用して降園しております。また、春休み、夏休み、冬休みも同じ時間で子どもたちをお預かりしております。ことしは夏休みは、お盆の期間を除いて、毎日10名から15名ほどが登園してきておりました。

あと、未就園児の子育て支援も行っております。保護者の方と一緒に活動するコースが2つあります。1回1時間程度、体操したり、手遊びをしたり、絵本を読んだりしています。年間30回のコースと年間8回のコースがあります。両方で116組の親子さんが活動しています。ほかに、2歳児さんが在園児さんと同じように、おうちの方から離れて登園してくるクラスがあります。月水金コースと火木コースとありまして、現在36名が登園してきています。今年度の担任は中学生と小学生の子どもを持つ職員です。おむつがとれないとか言葉がおそいなど、子育て相談的な役割も担ってくれています。

まだまだ開園7年目で、未熟な園なんですけれども、子どもたちの健やかな成長のために、職員一同、今後も日々精進してまいりたいと思います。地域の皆様方も温かく見守ってくださいますようお願いいたします。

○大方委員長 ありがとうございます。

そうしましたら、委員の皆様で、理事長様、園長様にお尋ねになりたいことがございましたら、どうぞ尋ねてください。

どうぞ。

○野澤委員 すみません。延長保育の時間というのをもう一度教えてください。

○清高幼稚園園長 はい、7時30分から午後6時30分までです。保育時間を挟んで、前後で延長保育をしております。

○野澤委員 真ん中に普通の正規の保育時間がありますね。その初めと終わりを延ばして延長保育というふうにされている。

○清高幼稚園園長 はい、そうです。朝だけ利用する子もいますし、保育が終わってからだけ利用する子もいますし、お母さんがフルタイムでお勤めのお子さんは朝から早く来て、夜遅く、夕方遅くまで残っている子どももいます。

○野澤委員 夕方は何時から何時までですか。

○清高幼稚園園長 保育が終わりましてからですから、徒歩通園児さんは、2時の保育が終わり、2時から6時半までです。

○野澤委員 6時半まで、

○清高幼稚園園長 はい。

○野澤委員 一般に預かり保育という言葉が使われていますよね。それとは違うわけですか。

○清高幼稚園理事長 一般的には預かり保育なんです。

○野澤委員 同じと見ていいわけですか。

○清高幼稚園理事長 はい、そうです。ですから、預かり保育の中に、私の今、朝の分は早朝保育、それから保育終了後は延長保育なりホームクラスとかというクラスをつくっているということなんです。

○野澤委員 それは、幼稚園に延長保育という言葉は、ここにいらっしゃる委員の方に伺いたいのですが、一般に延長保育という言葉は使われておりますか。じゃなくて、預かり保育は預かり保育ということなんです。今お話しいただいた園では早朝の延長保育、そこが一つの特色というふうに見てよろしいですか。

○清高幼稚園理事長 希望するお母さんがいらっしゃいますんで、保育は9時から2時が基準なんですけれども、本当は指導要領でやれば、もう少し短いんですが、うちは一応9時から2時を基準にして、どこの幼稚園も、どこの園もつくっているんですけども、その中で、どうしても9時では仕事が間に合わないという方は、最初は無料にしていたときもあったんです、交代をして、学園として。それがだんだんふえて、9時が8時半になり、8時半が8時になり、そうすると、今度はそれを超えてしまって、7時台の方も出てくるしと、これじゃ、やっぱり職員体制として、8時ごろにはほとんど出てきていますけれども、7時半ということになると、だれかと交代で出ないといけませんので、これを制度化したと。学園の中で制度化して、7時半から受けますよというふうになるわけですよ。

ですから、これも、先ほど私言いましたニーズ、いわゆる希望があればということなんです、いわゆる姉妹園の、ほかの姉妹園、うちのケース、姉妹園の中では、朝は7時半以前の子どもは余りおりません、実際のところ。ですから、7時半に設定しました。けれども、終わりの6時半は、5時に終わって、電車を使って帰ってくると、6時半にはちょうど間に合わないと。その辺がぎりぎりなんですよね、フルタイムで働いた場合は。そうすると、6時半を超えてこられる方が何人か出てくると、やっぱりこれも特別につけなくちゃいけない、職員をつけないといけないということから、姉妹園のほうでは、これは田舎のほうですんで、大阪市内から電車で来ると、どうしても1時間半はかかる、さらに歩いてくる時間を入れると、もう30分欲しいということから、7時に設定しております。

そういうところで、同じ学園の中でありながら、時間は、その辺は裁量で、ここまではニーズがあるなと思えば、そこも延ばしますし、一つの説によると、保育所並みの7時から7時というのも一つの方法ですし、これをやっている幼稚園は系列あります。

○大方委員長 ありがとうございます。

どうぞお願いします。

○松岡委員 現在のクラス数が5クラス、4クラス、3クラスというお話でしたけれども、ひとクラス何名ぐらいですか。

○清高幼稚園園長 年少児は25名と23名のクラスがあります。年中児は二十七、八名になっています。年長は33名。

○松岡委員 文科省の指針でいうと、35名が上限というふうなことが言われております。下のほうがこれはあいまいなんで、先生のところは、下、どのくらいが子どもたちの教育にとって望ましいかなというお考えがあったら、伺いたいと思います。

○清高幼稚園理事長 今、35名という話が出ましたけれども、これも一概には今のところはいえないんです。といいますのが、法律といいますか、それが所謂幼稚園の教育指針、それでは以前は40人学級だったんです。ですから、兵庫県にある幼稚園はいまだに40人、1クラス定員です。これを自主的に35人以下に抑えているというのが現状です。ですから、新しい幼稚園は35人学級でないと認めませんよと言われておりますので、35人学級でスタートしているというのが現状ですね。

それから、下限のほうは、これは希望者を例えば35人学級にしようと思えば、35で割って、残り少し出れば、その子どもたちは、ほかから持ってくれば、平均して30人なり、あるいは、クラスが少なければ、25人というクラスが設定されるわけですね。ですから、受け付けの状況にもよりますし、それから、言ってみれば、認められる、認可される人数以内で設定されるということなんです。

○松岡委員 下が何名くらいが限度かなと、お考えがあればそれを伺いたい。例えば20名を切ったら、ちょっと教育的にはうまくないかなという考えがおありかどうか。まず、少なければ少ないほど、目は行き届きますよね。しかし、それでは、3歳児、4歳児、5歳児の教育の観点から、いかがなものかというふうなところなんです。

○清高幼稚園理事長 そうですね。幼稚園は教育の場で集団教育する場所、保育所と違うところはそこなんですけれども、実際に今まで、うちも、少ないので、7人で発足した学年もありました、3歳児で。これはそれだけの子どもしかいなかったんですけれども、これは7人が進級するときには15人ぐらいにはなったわけなんですけれども、最初の受け付けが7人、実際に発足するときには18人ぐらい、1年間終わっていけば、18人から20人ぐらいになったのがあります。

じゃ、どこでとめるのかということになると、これは、一応クラスは発足して、それが10月、11月、12月、一遍、もう一人どうしても入れてほしいということになると、これは家庭の事情でしょうけれども、受け入れざるを得ない場合も出てきます。その場合は、話を聞いて、お受



けするということになるわけですね。じゃ、どこまでいけばということになるわけですが、3歳児でいきますと、20名前後が今では適当かなと思うんですが、一応、認可は25名なんです、今。それから、4歳、5歳は認可は35名がほとんどなんです、うちのように40名が35名、自主定員ということでやっているところ、これが何名まで下がれば、これは割ったクラスによりますんで、今までは非常に少ないときで15名というクラス、学園の中では15名で発足したクラス、学年もありますし、ですから、そのときの条件によりますんで、やむを得ないこともありますし、それから、ぜひここまでは欲しいという、受け付けしてくれなければ、非常に少ない人数ということもあるわけですから、難しいところですね。

これは、そのときの園長が現場において、これはムと思えば、止めますし、それは、変な話ですけども、ことしは手を焼く子どもが多そうだなと思えば、25を考える人も23でとめようかとかという話も、相談もしますしね。これはそのときの状況をみながらということです。

○大方委員長 ありがとうございます。

○舛谷委員 すみません。今の松岡委員に似たような話にもなるところがあるんですが、最初、理事長、聞き間違えたかな、二十何名から300名ぐらいになったというお話ありましたね。

○清高幼稚園理事長 清高の。

○舛谷委員 生徒さん。

○清高幼稚園理事長 清高、今、300人。

○大方委員長 たしか、公立をお受けになったとき、少なかったんですね。

○舛谷委員 そのときは百何名とおっしゃっていましたね。

○清高幼稚園園長 初年度は101名でスタートしました。

○舛谷委員 101名から今現在328名ですかね。

○清高幼稚園園長 はい。

○舛谷委員 それで、二十何名に関しては聞き間違いですか。

○清高幼稚園理事長 いや、そのときの前の年、引き受けるときの公立の清高幼稚園がそれぐらいでしたという。

○舛谷委員 全体で。

○清高幼稚園理事長 はい、全体で。

○舛谷委員 じゃ、これが何で300までいくのかという、単純に考えましてよくわからないんですが、要は、それは、そういう保護者が感じる教育の内容なのか、それとも、理事長先ほど言われました、よその地域のあれがなくなりますかね、枠が、また、そのためなのか、その辺

はどうなんですかね。

○清高幼稚園理事長 分析というほどでもないですけども、考えられることは、高石に、この南地区には私学がなかったから、要するに、高石以外の希望していた方が清高ができるということになって、こちらに来られたと。

○舛谷委員 高石以外。

○清高幼稚園理事長 ええ。

○舛谷委員 高石以外では何人ぐらいいらっしゃるんですか。高石……。

○清高幼稚園理事長 それはちょっと、いや、高石以外の子どもじゃないんです。高石市の子どもがよその幼稚園にという、泉大津だとか堺の幼稚園に行っておられた方が、近くに幼稚園ができれば、そっちに行こうかという方が……。

○舛谷委員 それは、バスというか、通学をやっている車で就学可能なんですね、利用させるというのは。

○清高幼稚園理事長 今はね。できた時点はバスは持たないでと言われていましたんで、3年間はバスなしで。ところが、それ、だんだん集まってきますし、そうなる……。

○舛谷委員 実際、教育の内容とか、当然ここではおっしゃらないけど、あるわけですね。

○清高幼稚園理事長 はい、一生懸命頑張っていますんでね。見ていただければ。

○舛谷委員 それと、すみません、今、松岡委員もちょっとおっしゃったことを、言い方を、聞き方を変えながらお聞きしますけど、先ほど園長さん、刺激し合うよい環境をということをおっしゃっていましたですね。それは、よい環境というのは、いわゆる適正規模なんじゃない、これ。

○清高幼稚園園長 それは延長のクラスのことでお話しさせていただきました。延長保育……。

○舛谷委員 いずれにしても文科省のほうは35という形、以下と言いました。そやから、あと1とか2とか、そんなことやないと僕は思うんです。だから、適正なのは20とか30とかというのはいろいろあると思うんですよね、以下をつけなくても。ただし、だから、その辺で一番いいのは、今までの、ある委員の方が、ある程度、生徒自身、園児そのものが、刺激し合ったほうが小学校に入ったときに活発でいいというお話もあったんで、そういうことからいって、適正規模というのはどのぐらいか知りたいのですけれども。先生とこのあれでいきましたら、大体いくらぐらいかというところが知りたい。松岡先生お話ししたのと全く一緒やと思うんですけど、それは言われたいということですか。

○清高幼稚園理事長 募集が結局何人かというのをつくりますのでね。施設に余裕があれば。

○舛谷委員 いや、募集とは関係ないんですね。教育者として、それは一番いいなというのを何人か。

○清高幼稚園理事長 これは難しいところでね。先ほどの話ですけれども……。

○大方委員長 理事長先生、園長先生にしたら来てくれなかったら、どうしようもないとお気持ちをたぶんお持ちだと思うんですけども、ただ、じゃ、仮にですよ、集団として子どもの育ちと考えたときに、5人、6人でもいいと、もちろん来てくれなかったら仕方がないということもあるんですけども、お客様として考えるか、子どもがいると考えたときには、何人ぐらいがいいと思われませんかということをお二人はさっきから聞かれているんです。

要は、少なかったら、よく見れるんじゃないかという議論もあるんですよ、より、1人や2人のほうが、でも、幼児教育というのは家庭教師をやっているわけではないので、ある程度やっぱり人数がいるほうがいいんじゃないかということがあって、現実的なこととして園長先生も現場にいらっしゃる立場として20人ぐらいいたらいいかなと思われているのか、いや、それはとことん少ないほうがいいですよということなのか、そのところのご意見があれば、教えていただきたいというのがお二人の意見なんですけど如何ですか。ないというんなら、ないで、わからないなら、わからないで結構なんですけどね。

○清高幼稚園理事長 個人的には、ある程度少ないほうがいいということなんですけれども、やはり今までいろんなケースを見てくると、3歳児は25名が定員なんですけど、15名以上は欲しいですね。というのは、やっぱりその保育を見てましてね、8名、10名でやっているところを見ると、何となく覇気がないというのか、いわゆる刺激し合いが少ないというのか、そんな意味では、やっぱり3歳児で15名以上は欲しいと、それから4歳でいけば、やっぱり20から25名は欲しいなど、これは気持ちです。

○舛谷委員 クラス数はどうですか。

○大方委員長 クラス数はいかがですか。複数クラスと単数クラスで如何思われますか。

○清高幼稚園理事長 やっぱり保護者の中ではクラスが入れかわってほしいと言う方もいらっしゃいますんで、仮に同じいくにしても、交流があるにしても、これは複数のほうが私は望ましいと思います。

○大方委員長 さっきからおっしゃってたのはそういうことも含めてだったんで、すみません、私も言うこともないんですけど、それでお二人、ご意見はよろしいですか。

ありがとうございます。何回も聞いて、すみません。

じゃ、どうぞ。

○金谷委員 先ほどの預かり保育のほうにちょっとお話がもどるんですけども、その内容ですか、中身というのはどんなふうなことをされているのでしょうか。

○清高幼稚園園長 ほとんど自由遊びになります。その日の子どもたちのしたい遊びなどをし、遅くまで残っている子どもはおなかがすきますので、大体3時ごろをめぐりに少しおやつを食べて、後はお天気がいい日は外で遊んだり、本当に自由保育といいますか子ども楽しみたい遊び優先の保育となっております。何か保育をしているというわけではないです。何か設定保育をしているというわけではないんです。子どもたちの遊びの中で、いろいろなものを学んでほしいなと思っております。対象は2歳児から5歳児までの子どもの縦割り保育になりますので、何かねらいを持った保育というのはちょっと、年齢が幅広くなりますのでそれはできかねますので。

○金谷委員 今回、教育要領がね一方で預かり保育その中継というのが普通の保育、そして、そこからのつながりというものがあるはずで必要というふうに書かれているんですね。そういう意味から、通常保育のその時間外から、後、遊びを受け継ぐというんですか、中身をということが必要ではないのですか。

○清高幼稚園園長 通常保育を9時から2時まで保育を受けておりますので、ちょっとほっとするような時間というのはやっぱり必要だろうと思っております。うちの場合は私服に着がえて延長保育のお部屋に集まってくるわけですけども、そこで担当の職員と「ただいま」みたいな形で延長保育に入ってきますので、家庭的な雰囲気も大切にしたいというふうに思っています。

○畠中委員 2点、お伺いします。

1点目は今の先生と少し重なるんですけども、9時から14時までの正規の保育とその前と後、前後の延長保育ということをお使いになりましたけれども、同じ園としてどのようなポリシーで対応されているのか。まったく別個なのか、同じ保育者が当たっておられるのか、別枠なのか、その辺をちょっとお聴きしたいというのが1点、司会の先生から課題や問題点、今後の幼児教育の考え方という質問がだされているんですが、ご用意がなければ、今、感じておられることをちょっと、このテーマについてお聞かせください。

○大方委員長 まず一つ目からお願いできますか。

○清高幼稚園園長 延長保育は職員のほうで、正規の職員が延長保育の方を受け持っていますので、勤務体制のこともありますので、交代で、人数に応じた職員を配置しております。

○畠中委員 それは、ポリシーは、本来の対応と前後の対応は考え方としては別のものとして

位置づけているのか

○清高幼稚園園長 子どもたちにしましたら普段生活している幼稚園の場で、いつもともに生活している保育者とかかわっているわけですので、子どもたちとしては何かそこで区切りはあるというものでもないというふうに思っております。園としましても、そこで全く別個というふうにも考えていないんです。

○大方委員長 つまり、同じ先生が、担任であろうがなかろうが、縦割りとさっきおっしゃっていたんで、朝であろうが延長であろうが、本来なら地域や家に帰って行って遊んでいることを幼稚園の安心感の中で預かっていらっしゃると、その中で「ただいま」と言って、昼間の教育課程の保育と少し一応家庭外で、イメージを区切りつけていると、できるだけ家庭的な保育を心がけてらっしゃるというイメージですかね。

ただ、2つ目の、さっき私が申し上げましたのですみません、ご用意されていなかったら、申しわけないんですけど、公立から民営化というか、お受けになって、子どもさんの定員は充足をされていると思うんですけど、やりながら課題とか問題点とかがもしありましたら、なければいいんですけど、教えていただきたくて、さっき私が最初に質問をさせていただいたんです。

それと、今、幼保一元化とか、いろんなことを言われていますので、今後、幼児教育のあり方としても何かお考えがあれば、理事長先生でも園長先生でも結構なんですけれどもお話いただけたらと思って、なかったらいいので、今、そのことをお尋ねになっているので。そのことでも、保護者の対応でも何でもいいんです。日々思っていることとあるので、気楽に回答、別にテストしているわけじゃないので、緊張して申し訳ないです。

○清高幼稚園園長 はい、そうですね。子どもたちはですね、お母様方が、おうちの皆様方がここでのこにこと生活してくださっていただければ、子どもたちもにこにこと健やかに成長していつてくれるんだろうと思いますが、今、うちの園では今まで保護者の方の、いろんな悩み事みたいなものを園にやっぱり持ってこられますので、その保護者の方々の悩みにどうこたえていくべきなのかなというふうなものは思っております。

1つ具体例を挙げれば、保護者の方自身が、幼いときにご両親が虐待を受けていて、そして実際、自分の子どもの子育ての場面で子どもを叱ったときに、それは虐待に当たるのではないのかなというふうな、そういうふうな気持ちを持って毎日不安に思っている保護者の方のご相談を受けたり、本当にそういう直接子どもたちに関係ないということはないんですけども、そういう保護者の方のいろんな悩みがどんどん園のほうに持ち込まれてくるというこ

ととかですね。

あとは、ことし4歳児で、おむつをしたまま入園してきたお子さんがいらっしゃいます。どのようにおむつを外していけばいいのか、トイレトレーニングをどのようにすればいいのかということがわからずに、子育てに困っていらっしゃる保護者の方がたくさんいらっしゃいますので、その方々の、ケアといったらおかしいんですけれども、そういう子育て相談的なものですね。そういう時間が要ってくるんだろうなという議論です。

○大方委員長 わかりました。

ほかの委員の皆様、よろしいでしょうか。

じゃ、お願いします。

○片木委員 ちょっとお聞きしたいんですけども、初めは101名でやり出したということで、通園バスが通い出してから221ということで、今、年で328ということなんですけども、全市、綾園、千代田、羽衣、東羽衣、高師浜はどんなものかなということと、それと、延長保育の送り迎えというんですか、それはやっているんですか。そういうこともちょっとお聞きしたいのと、あと、もう一点、これはおっしゃられたと思うんですけども、未就園児で対象のこと、ちょっと聞き漏らしたんで、もう一度教えてほしいと思います。よろしくをお願いします。

○清高幼稚園園長 現在、園児のどこの地域から何人ぐらいというのは、すみません、きょうは持ってきておりませんので。延長保育利用者のバス送りというものもしております。

○片木委員 そうですか。

○清高幼稚園園長 はい。利用者はそんなにはいないんですけども。

○片木委員 ああ、そうなんですか。

○清高幼稚園園長 はい。

あとは、未就園児の話ですけど……。

○片木委員 どういう内容でやっているのか、ちょっと僕いなかったんで、すみません。

○清高幼稚園園長 未就園児、子育て支援としまして、親子さんで登園してくる具体数、1日1時間程度、体操したり遊びしたり絵本を読んだりする年間30回のコースと年間8回のコースというものがあります。あとは、2歳児さんが在園児さんと同じように、お家の方からはなれて登園してくるクラスがあります。

○片木委員 事業内容。

○清高幼稚園園長 先ほども申しあげましたように、この2歳児さんの来園児と同じように登園してくるクラスの子どもたちは、先ほどと同じようなこととなるんですけども、子育てに

悩んでいらっしゃるお母様、おむつをとれないとか言葉数が少ないとか、近くに相談なさるご家族の方がいらっしゃらないとか、そういう形が入ってこられる方がたくさんいらっしゃいます。

○片木委員 ちょっと聞き間違いかも知れませんが、延長保育のほうで会員制と聞いたんですけども、これはどういう、違いますか。

○清高幼稚園園長 会員です。

○片木委員 すみません。

○清高幼稚園園長 あらかじめ長い時間お預かりいたしますので、何かあったときに、すぐに連絡しないとイケませんので、延長時間内の緊急連絡先などをお伺いして、そして登録制という形にしております。

○大方委員長 長い時間すみません。わざわざお越しいただきまして、どうもありがとうございました。

じゃ、一応、これをもちまして清高幼稚園さんのほうはご退席いただきます。どうもご協力いただきまして、いろいろありがとうございました。またいろいろ参考にさせていただきます。ありがとうございました。

ご苦労さまでございました。ちょうど定員の充足率が公のときから民にかわってかなりの充足率になっているので、委員の皆様もいろいろ聞きたいことが多々あったんじゃないかと思えます。またきょうの意見は参考にさせていただけたらと思っています。

先ほど、ご欠席ということで報告あったと思いますが、羽衣保育所保護者代表の長澤邦男様から意見書が届いておりますので、読み上げさせていただきたいと思えます。

まず、高石市の公立幼稚園の抱える問題点とその原因を明確にしましょう。なぜ定員を大幅に下回るのか。私立のほう 서비스가よい、共働きのふえ、保育所のほうがニーズに適しているなど。これが1点です。

2つ目は、公立から民営化された幼稚園のその前後の違いを明確化しましょう。定員の充足率、保育サービス、料金、市の費用負担、親の満足度。

3つ目は、あくまでも主役は子どもたちであるので、大人または組織の利権だけを目的とした方向に進まないようにするための検討も必要ではないでしょうかということ、3つのご意見を頂戴しております。羽衣保育所の保護者代表の長澤邦男様ですので、また意見のほうよろしくをお願いします。

そうしましたら、時間もどんどん押し迫っていますが、事務局から、今日つけていただいて

おります資料のほうのご説明のほうお願いいたします。

特に本日の会議は、市立幼稚園の適正規模及び適正配置に関することが今日の中心課題ですので、資料の説明もできましたら、その点を中心にご説明いただけたらと思います。どうぞよろしく申し上げます。

○事務局（杉本） それでは、事務局より資料の説明をさせていただきます。

資料の目次にありますとおり、1つ目といたしまして幼稚園の設置基準、2つ目は高石市立幼稚園条例施行規則、3つ目が1学級あたりの園児数の推移、4つ目といたしまして近隣各市公立幼稚園1園あたり、1学級あたりの園児数となっております。

まず、1ページから7ページまでが幼稚園の設置基準でございます。

ここでは第3条におきまして1学級の園児数が35人以下を原則とすると定められております。

次に、8ページは本市の幼稚園の定員についての資料でございます。加茂幼稚園の5歳児が105人、これは35人が3クラスというふうになっておりまして、それ以外につきましては各幼稚園の4歳児、5歳児の定員は70人（35人2クラス）となっております。

9ページは文部科学省の学校基本調査報告書でございます。各年度5月1日現在の1学級あたりの園児数の推移となっております。

国立、私立、公立のすべてにおいて減少傾向となっております。

最後に10ページでございますが、平成21年5月1日現在の近隣各市公立幼稚園1園あたり、1学級あたり園児数となっております。

右端が1学級当たりの園児数となっております。岸和田市の27.1人が一番多く、泉南市の17.0人が一番少ない園児数となっております。

なお、泉南市におきましては、現在、幼稚園数の9園を2園にする再編で進めているところでございます。

配付資料の説明については、以上でございます。

○大方委員長 ありがとうございます。

そうしましたら、今回の市立幼稚園の適正規模及び適正配置ということで、皆様から前回、公立と私立の役割についてということもお話の途中だったと思いますので、そのことも含めまして議論したいと思います。

今、上限35名というのも出ていましたので、これは私たちが勝手に決めることではないですけど、さっきからの清高幼稚園さんに対するご意見があったように、下限のほうをどうするかという問題があって、先ほどの資料から見る部分においては、泉南さんは9園を2園にすると



ということになっているので、ちょっと別に置いておきまして、高石市が、それを除くと、1学級当たり20.9というのが一番少ないということですかね。あと、大体23、24ぐらいになっているのかなと思っていますけども、その辺のところ、きっちりした数字にしなくてもいいと思うんですけども、概ねこれぐらい、これ以上ぐらいのところ皆さんのご意見になればいいのかなと思います。

それから、1学級あたりの園児数の推移のところ、減少しているということを事務局言ってくださいましたけれども、国立が27.8、私立23.9、公立20.1ぐらいのところですから、どれだけ見積もっても20人より下っているということはないので、単純に考えると、20人以上、35人以下ぐらいになるのかなというふうに、この表だけを見ますと、そんな感じはいたしますけど、いえいえ、もっと少ない、もっと多いということも当然あってしかるべきだと思いますので、その辺のところを皆さんのご意見を伺いたいのと、それから前回の公私の役割ということをもう一度、公立の役割、先ほどから相談業務ということも清高幼稚園さんからも出ていましたけども、いろんなことを考えて、これからの幼児教育も課題が多いと思いますので、よろしく願いいたします。

どうぞ、お願いします。

○舛谷委員 その前に、すみません。実は、この前のときに、終わりのときに、野澤さん、地域保育というお話が一つ出ておりました。直接関連があるのかどうか、最後、聞いていないんですが、もしよろしかったら、野澤先生ちょっとお手をわずらわしまして恐縮ですが、いかがなものでしょうか。

○大方委員長 どうぞ。先にどうぞ。

○金谷委員 今まで全部、私立のほうの……。

○大方委員長 現在の数字ということで、野澤先生、すみません。待っている間考えておいてください。

○野澤委員 これ、後でもいいことです。

○大方委員長 どうぞ。大事なことから、今の間、頑張って考えておいてください。

○金谷委員 前回から、今回で私立のほうのお話を聞かせていただいて、公のほうですね、公のほうとしてどういう役割があるかということ、今からちょっと話をさしてほしいなと思いましたんで、ちょっと時間をとるかもわかりませんが、やっぱりいろんな、今、前回と今回、聞かせていただいて、私立、民のほう、いろいろオプションがたくさんありますね。そういうふうなところが、ある程度、お金がないと、商品というか、そういったことになってい

るかと思うときに、保育そのものを考えるということに打ち込む、その中で心を育てる保育ということ、そのことに向かっていく、邁進できるということが1つ。

それから、大ざっぱにいきますと、あと支援教育ですね。それは、支援教育のほうも心を育てることができていなければ、ただ受け入れるというだけのことになってしまいますので、一番のものは、やはり心を育てる保育というところはかなり重要だと思います。

それから、もう一つは、また教育要領の実践ですね。こういうところでも研究保育、それから公開保育、いろんな面でリーダーシップをとって、今、公立幼稚園というのはそういうところをやっぱり見ていただく場、そういったこともすごく大事なかなと思います。そういうことも通して、教員の資質向上、そういったことも役割を担っているんじゃないかと思います。

それから、主にはその4点ということになるかと思いますが、一番のまた特色でもあります地域で育てられるというか、地域のコミュニティーの一員として、その中でつながる、深めていく、各種いろんな人とかかわりの事業であるとか、また地域の方から守り育ててもらっているそのよさ、地域に根差す教育というところで、大きくくくると、そういうことになると思うんですけれども、民のほうからはやっぱり、いろいろ今回聞かせていただいて、目標等は文章化すると、どこも同じ、変わりはない。公立も確かに、文書化すれば、同じようなことになると思うんです。

幼稚園というのは、教育要領に沿って保育をするということは特に公立では課せられていますが、その具体化ということについては各幼稚園ごとに違うのが現状なんです。それは、子どもが違うのではなくて、何を大事に考えるかの違いはあります。ただ、民では先輩方の保護者のニーズとして、今回のもそうだったんでしょう、今回、保護者としては聞いていませんけれども、こういうところをしていますというお話の中に英語とか水泳、体操、その他の数々のオプション、そういったことを求めておられたことが共通していたかなと思います。

その共通性の根底というのが、この間もおっしゃっていましたが、子どもが小学校に行ったときに子どもが困らないように、それから少しでもつまづかないようにと思われるのは親ごさんとして無理のない部分があるかなとは思いますが、そこでその幼稚園における教育ということの本質の取り違えをされているというところが幼稚園教育というものの説明の難しさがあるのかなと思います。教育というのは本質がわかってもらえないということ、目標やねらいというのは本当に、文にすれば、どこも大して変わりがないんですけれども、実質的な保育のとらえ方の違いが保育の違いとして出てきてしまっている。

だから、前回聞かせていただいた英語、体操、水泳など、そういったことを経験しておけば、

じゃ、小学校でちゃんと授業を受けられるのか、それから何もつまずかずにいけるのか、その結果は私たちはちょっと、小学校はのべれませんので、わかりませんが、どうしても親ごさんが、子ども自身よりも親が安心したい、子どもに自分の精いっぱいをついに夢をと励ますのではなくて、先に転ばぬ先の杖のような感じで選ばれているのかなという感じはします。むしろ、常に親が出て行くということはできませんから、やっぱり子ども自身をたくましく育てなければならぬかなと思います。

そういうところで、公立の役割、特徴と民のそれとは、ま逆のところにあるかと思うんです。公立には種々のオプションはないんですけれども、とにかくステップ、だから、これだけストレートに子どもを育てる基本的なところに根差していくことができる。その一番基本的な、基礎的な人間を育てる、培うということが中心になります。急いでいろんな経験、お勉強の下準備をと思われるのでしょうけれども、もっと本質的な部分で、どんな中においても自分なりの対応ができる子にと思って保育しています。だから、その中で一番大切なことは、先ほども言いました心を育てる保育だと考えています。

だから、常に、どんな日もその心を育てるということに向かっているかならないんです。側面には教育要領があり、その実践・具体化をしていくというのも役割の一つですけれども、その中で子どもの人間性の部分に思うということを経験していく場やと考えています。総合的に人間部分にかかわることをするという事なんですね。分野別にすれば、5つに分けられますが、それら一つ一つを別にするのではなくて、毎日の園での生活が心の育ちという核に向かっているかならないかなと思います。

今年度、高石市の教育課程作成に、6園で取り組んでいるんですけども、その研究の中で毎回実践を持ち寄ったり、また研究保育、公開保育をしたりしています。その中に、今ちょっと申し述べたようなことが具体的になってきている保育がありました。それは身近な自然を相手に子どもの心に問いかけていくということをしています。動くもの、生きているものというのは必ず子どもの心を動かしてくれるんです。そういうところで保育の紹介をすることで、幼稚園というものを少しでもわかっていたらどうか、ちょっと証明してみたいと思うんですけど、よろしいでしょうか。

○大方委員長 今、何ておっしゃいましたか。

○金谷委員 いや、記録をちょっと見せていただこうと思って、具体的なところで、どんなふうに考えているのか、どういった点を学ぶのかということをやっと投げることで……。

○大方委員長 感じていただける。

○金谷委員 いや、どうでしょう。えっと、ある一つのクラスの記録です。7月の実践なんですけども、クラスの男児が10人でアメガエルを15匹つかまえてきました。ほかの子どもたちも見ただって、クラス全員で社宅の庭に行かせてもらって、草刈りしたので、初めはなかなか見つからなかったが、30人で草の中を歩き回ると、ぴよんぴよん飛び出してくる。つかまえてみれば、全部アマガエル。

園に連れて帰り、早速ケースに入れるが、みんなが自由に見たり、触ったりできない。子どもたちから広いお池で泳がせてあげよう、楽しく遊べるようにしてあげようと声上がり、「じゃ」、先生が「どうしたらいいか、考えみてね」と言うと、翌日、Iちゃんはアジサイの葉っぱを、それからKちゃんはよいにおいがするバラの花びらを、Yちゃんは小石をと、次々、登園時に何かを持ってきました。「どうしてそれを持ってきたの」と聞くと、「葉っぱの下に隠れたり、上の乗って遊ぶかなと思って」、それからまたKちゃんは「いいにおいの花びらが好きだから」、Yちゃんは「石の上に乗って休めるから」と、みんなの前で話しました。

実際に池の中に入れて、カエルたちを放してやると、うれしいことに、子どもたちの願いどおりに、上に乗ったり、隠れたりし始めました。子どもたちは大喜び。そのことをみんなで話し合い、共通理解しながら共鳴して、心に落としていくと、毎日だれかが見つけたり考えたものを持ってくるようになり、興味を持って、お池のカエルを見ることができるようになってきました。

ある日、Y児が真っ黒な石を持ってきました。いつものようにカエルを放してやると、黒い石にピッタと乗ったかと思うと、みるみる体の色が黒く変色し始め、3分後には細い足まで黒くなった。それを見ていた子どもたちと担任は、「色が変わるんや」「アマガエル、すごいな」「敵が来ても、これだったら、化けて助かるな」と喜びました。

その後、遊びの終わりにケースにカエルを戻そうとしたところ、2匹のカエルがいないことに気がつきました。みんなで必死に探したが、なかなか見つからない。逃げていったのかとあきらめたとき、植木鉢の根っこから同じ色に変色したカエルが今度は飛び出してきた。「うわっ、変身してるから、わからなかったんや」「さすがお父さんガエルやな」「見つからんように隠れてたんや」「このおうちが好きなんやな」と、それぞれに納得。

表現では、黒い石にぴったり体をくっつけて色が変わっていくという、その表現を子どもがしました。すると、周りで見っていた子が、その子の余りの本気さに見ていた子が「だんだん色変わってきた」、何も変わっているわけではありません。だけど、そう思っ見える。黒くなってきたと共感の言葉が聞けた。

それからは、クラス共通のものとして、カラスがカエルたちをねらっているということやら、お父さんガエルが子どものカエルちゃんにおうちで泳ぎを教え、隠れたりすること、変色したり根っこの奥に隠れる、それから葉っぱの下に潜るなど、いろんなことを教えるとか、そういったことは実際に見たり遊んだりしたことと、そして自分たちの思うこと、クラスのお話とつながっていったように思いました。

6月末からプール遊びが始まりましたが、プールの中でお歌に合わせてカエルジャンプやカエル泳ぎ、飛び込みも遊びましたが、どの子どもとても喜んで、大いに盛り上がりました。カエルとの遊びはプール遊びにも生かされ、楽しめたのがよかったと思います。というふうなことなんです。

こういうところで、毎日、子どもたちが心に思うことというのを必ず話し合いとか表現とかで出させていって、自分はこう思うと、そのことを友達の前でいろんな意見として述べ、そして、お友達の意見やら思うということを知り合っていく、そういうことが毎日毎日積み重ねることでクラスというのができてくるんですね。そのクラスができてくると、最終のプール遊び等におきましては、いろいろそれぞれ、水泳に行かなくても、教えてもらわなくても、思いっきり十分クラスで認められているというその実感があると、お水の中に飛び込んで、自分なりの精いっぱい頑張ってみる。上手に泳ぐことはできません。私たちも、そういう面では、プロではないので、うまく教えることはできませんけれども、意気込みがちゃんと伝わってくるんです。そうすると、周りの子どもたちが本当に、「すごい、Tちゃん頑張ったな」、本気で拍手が送れる、そういうところをずっと大切に保育をしています。

そのことが心を育てる保育だと私たちは思ってやっているんですけれども、そういったことを、1学期、2学期、3学期と、ずっと続けていきます。その中で、いろいろ本当にクラスというのはきちんと立ち上がってくると、例えば、うちは最終のところでは修了のとき、修業式のときに証書をいただく、そのとき「だれちゃん」とお名前を呼ばれたら、しっかり歩いて、自分の足取りでちゃんと証書をもらいに行く、そのときの顔、それから歩き方、そういったところにしっかりとしたものが出てくるはずなんです。

そういったことで、証書をいただいて、今度は、もっと平たく言うと、小学校へ行って入学します。そこで校長先生から「入学おめでとう」と言われたときには、自分の気持ちから「ありがとうございます」と答えられる、そういったあいさつとか、そういったことも全部を含めて心を育てるということはそこにかかわっていくことだと思って、一番中心に据えてやっていることなんです。

今、何点かお話しさせていただきましたけれども、支援教育ということも、だから、その意味からクラスづくりというところで、支援を必要とする子どもが当たり前クラスに受け入れられるクラスづくり、そういう心の育ちがなければ、ただいるというだけになってしまいます。だから、そういうところでもとても頑張っってやっていかないといけないということがあります。

それから、教育要領の実践、これは、もう先ほども言いましたけれども、いろいろな役割、リーダー的に何度も公開したりということが言えるかと思います。

それから、教員の資質向上とかというのは、これはとにかく心というところで核に据えていると、もっと教員も使命感とか情熱とか愛情とか、そういったことが出てくるんだと思うんです。そういうところも絶対怠ってはならないことだと思っています。

それから、地域で育てられるということ、そして、あとは1つ、保育料のことですね。公立のほうは8,500円ということで、ある程度低額というふうなことはあるんですけども、そういう面からも経済的な面での支援が必要となるというその一面はあるかと思うんですけども、このことについては第2回目のときに話し合うはずのデータをいただいています。あれで、この間、その中身を読ませいただきましたときに、預かり保育だとか、いろんな延長保育だとか、そういったことをニーズとして何%として出されていたと思うんです。ページはちょっと私忘れてしまいました。

ただ、就学前の保護者、就学前の子どもさんをお持ちの保護者に伺っているというその結果なんですね。そこで、たしか、今の間、子どもが小さいうちは自分で見て育てたいと、だけど、その先、1年後、2年後には預けたりといった、そういったことも考えたいというところがあったと思うんで、その方たちに、ですから、もとは、募集なんかは六十何%でしたか、自分で育てたいということがかなり数値が高かったと思います。そういうことからすると、公立幼稚園のほうでは、どうしても専業主婦でない、というようなところがあります。

中には、働いておられて、おじいちゃん、おばあちゃんに送り迎えをしていただくとか、そういったこともあるんですけども、そういう点からしますと、公立幼稚園でもある程度、これはただ違い立てに言うのではないんですけど、一つの例として考えていただきたいんですけど、公立で3歳児保育をすれば、やっぱりしばらくは自分の目で見て保育したい、それから、ちょっと大きくなれば、働きたいと、そういうことがデータの中にきちんと出ていたと思うんです。だから、一足飛びに預かりだとか延長だとか、そういったことで並んで考えたところ自分なりという気はなかったかと思います。だから、その辺も、ちょっと後で含めて検討していただきたいなと思います。

すみません、長くて。

○大方委員長 ありがとうございます。

公立幼稚園のほうからの思いというか、先生の熱い思いを伺ったということです。

ただ、ここで公立をやめようという廃止の話をしているわけじゃないので、あくまでも子どもの最低保障の公立が必要ということを皆さん思っていますので、公と民で役割をどう考えるのか、少子化の中で、どうバランスをとって、公は公にしかできないことって何かなとか、私立には私立しかできないことって何かなということが議論できたらいいかなということと、それから、私立も、すべてがすべて英語をやっているところばかりではないので、当然、先生の実践発表にあったようなことを大事にされている園もありますし、もちろん英語とかということの目玉商品的にやっている園もございますし、それは民の場合は種々さまざま多様化していますので、公のような一本化ということはちょっと議論しにくいんですけど、私立はそれぞれ、そういう公立的なことをやっているところとそうでないところがあるという現実ですから、それは私たちがこうなさいと言えらるべきものは、幼稚園そのものはどちらも必要なことだと思っています。今度からちょっと、公立廃止論を今議論するんじゃないので、よろしく願いいたします。

ただ、適正規模を言っているのは、子どもの大切な命を考えるときに、先生がおっしゃるような心の育ちを考えたり、人との関係づくりを考えるとき、そこをこのところを考えるときに、やっぱり何名ぐらいがいいのかなということの適正規模であって、大人の議論で、組織論や運営上、お金のことだけではなく、そこは含めて議論を進めていただきたいと思います。

野澤先生、お願いできたら。

○野澤委員 この委員会が幼児教育のあり方検討会ということですので、私も最後はゼロになる可能性をどう考えるかみたいな議論になりそうな気がするんですね。私は、そうじゃなくて、やっぱり幼児教育の本質を持っていて、いい幼児教育を高石市に移行する、そこがまず確認し合う中で今後の方向というのが出てくるんじゃないかなというふうに思うんです。

今、とてもすてきな公立の保育の内容がお話しいただいて、幼児教育というのは基本的には家庭で育てるといって、そこをベースにして、家庭の教育を幼稚園という、そういうところで、子どもの発達にも幼児期というのは幼稚園と家庭と地域、この3つがセットになって育てていく、そういう時期だというふうに思うんですね。

地域で育てるといってのは、例えば保育所もそうだと思うんですけども、文化とかお祭りとかがありますよね。そういう意味で、やっぱり地域で育てるとおっしゃいますけど、同時に保育

所とか幼稚園で地域を育てる、あるいは家庭教育を育てるという、初めて子どもが心を育てるんだというふうに私は思うんです。そういうことで幼児教育を考えていく。いろんな、先ほど、お母さんからの相談がありましたよという、それもやっぱり家庭教育の一環として考えていけないといけない、幼稚園の場合は。社会教育の一環としても考えていけないといけないというふうに思っています。

地域保育とは何かって、ご質問があったんですけども、私は預かり保育という言葉がよくないんじゃないかなというふうに思っているんです。預かるなんて言ったら、荷物を預かるみたいじゃないですか。やっぱり人間を対象にするわけですよね。そこはやはり地域保育というか、地域の人が参加して、その場合、地域というのは広い地域じゃなくて、あの子がここに、このまちにいる、あるいは、あの子はここの子だということを大人が知れるような範囲です。ですから、小さな、目の行き届く範囲の地域の支援に思うんですね。

お母さんたちは幼稚園に送迎される、そこで園の先生と話ができたり、顔を見たり、園の中を見たりという、そういう交流が一つとても大事なことで、バスで連れて行って、連れて帰ってもらって、子どもの生活の場を一日見ないというのは、私はよくないと思っていますし、それから堺市からバスが来て、堺市のほうでずっと行ったり、さらって行って、園長、幼児教育、地域で育つというような、やっぱり堺市の文化を育てるという形になる、幼稚園でお祭りに参加するというのは。だけど、高石の文化に参加する、高石の文化で育っていくというのは、やっぱり子育てだというふうに思うんですね。できる範囲という、知る範囲が可能な一定の地域、それから園と家庭との交流、そういったものをミックスするような、そういう形の地域保育というのを、これはいろんな組織が必要だと思うんです。

今後、本当はいつも私はかなり保育所の役割というのは大きいと思っていますので、地域保育という、ここに、この地域の子を大人がよく知っていると、同時に子どもも、あそこのおじさん、おばさんという形で知って、ふだんから触れ合っていくような地域を育てる活動が地域保育というふうに思っているのは家庭を育てるし、園も非常に育てる、学校も育てるというふうに思っていますね。だから、ちゃんとして、やっぱり預かり保育じゃなくて、そういう言葉じゃなくて、地域保育で、いろんな老人会とか、それから婦人会とか幼稚園、保育所が参加して子どもを育てるような、そういうことができないかなというふうなことで、これは、私だけですけれども、思っているところです。

すみません、長くなって。

○大方委員長 ありがとうございます。



どうですか。地域保育のことを聞きたいと。

○舛谷委員 ありがとうございます。

○大方委員長 今おっしゃったようなことは、実際に預かり保育というような言葉、私好きじゃないんですけども、文科省が指定研修をしたときに、たまたま私はその助言者だったのですが、今おっしゃったことをそのまま豊中でやったんです。公立でやったから、予算もゼロでやったから、行政とつながり、関係機関との連携が強いので、そういう点をフルに活用しまして、実際に3年でやったのを、お金をかけないで、子どもたちの本来あった地域というものを一つの幼稚園という守られる空間で実践するということが可能なんだということを思ったんで、その辺のところ、私立はなかなかできないことを公立としてできたかなと思って、その辺のところは、今後は、公立幼稚園がいらなくなるのでは、ここ、まだ可能性は考えてもらっていいかなとは思っています。

○野澤委員 今、幼稚園に行っている子どもさんが全部で4万人にいますね。育っている教育が、その幼稚園児の思いがどうなの、みたいなのが発信ですよ、このところ。そこを完全に見向きしないで、こういうふうに、公立幼稚園の役割というのはそういう幼児教育、理想的なものと、やっぱりきちっとやっている。

○森委員 前回言う機会がなかったもので、本日の適正規模云々とはちょっと違うんですけども、本校も公立の保育所から私立の保育所、公立の幼稚園から、どこがいいとか、そんなものとかというのはわからないんですね。皆さん、特に幼稚園やら保育所と小学校との連携というんですか、連動しているというのはまだできていないというのは驚きですね。園長先生おっしゃった羽衣幼稚園と羽衣小学校が1年生と幼稚園の年長さんとの交流はできているんですけど、羽衣保育所さんとは、これがまだできていないんです。

小学校1年になりましたら、子どもたち、小学校では一番下なんですね。だから、保育中に面倒を見てもらう側になってしまうんですね、すべて縦割りにについては。でも、幼稚園で随分と年長さん来ていますので、子どもたちはそれはできるんですけども、そういうことを実は小学校と幼稚園、あるいは小学校と保育所と連携をしておくことというのも、これ、大事なことかなと。私立の幼稚園であろうと、それは関係なく、とにかく小学校と幼稚園の連携は大事なかなというのは私の思っているところです。

それと、上がってきたときに、余りに戸惑うというところも事実あると思います。幼稚園、今、うちに上がってくる子どもたちに少ない人数で保育されているところはないようなので、うまくいっていますけれども、それが少なくなるとどうなのかと思います。

○畠中委員 先生にかなり近い立場の議論なんですけども、統廃合の理論に傾斜しやすいです。というのは、幼稚園が家庭教育を支援していくということですね。これはケア支援と、ケアですね。それが安易に一元化に移行することにすこし慎重でありたいという、そういう概念において共通基盤を確保しつつ、それぞれの機能分担をとりながら、例えば公立の特徴は何かということを含めていかなきゃならないと思っています。そうであれば、虐待とか重度の障害が対象者に対する公的な責任のあり方ですけども、先ほど野澤先生おっしゃいましたように、家庭教育を支援していくとか、あるいはコミュニティー対策ですか、家庭とコミュニティーの場合に関してはやっぱりきちんと作り上げていくということが大事だろうと思います。

ただ、意見の一部に見られました公立幼稚園の議論が出ておりますけども、これは公立、民間による子どもの奪い合いをするようなことは、先ほど野澤先生のご意見の中にありましたけども、府内の私立園に出ておられるのは432名だったと思います。この市外の私立幼稚園に多くの園児の方を通わせてきたから、地元の幼稚園を選択することを促すような、そういう条件整備というものをもっと考えていく必要がある。

前回のヒアリングの中で、子どもを宅配便のように扱う、通園さすという表現が出てきますけども、ここで顔の見える近隣関係を構築していくことがコミュニティーの、地域社会の活性化にもつながっていくというような、幼稚園、公立幼稚園の施設がコミュニティーをとにかく再構築していくことも我々の仕事というのか、そういう中で私はいくべきじゃないかなと。

○大方委員長 まだお話しされていない方、どうぞ。

○川村委員 私は、今、娘がちょうど子育てしている最中で、現在、保育所に預けているんですけども、それは、理由としては、延長保育がないという、ただそこだけの問題だったみたいです。それで、何人かの同年代の子どもに聞いても、保育所に入れるのは、ただ自分が仕事に行く時間帯にしか幼稚園に見てもらえないからという、そこだけの問題やっただけなんです、それだったら、ちょっとでも延長保育してあげたら、もっと公立のほうに来るんじゃないかというふうな結果になりました。

だけど、先ほど地域教育のことをおっしゃっていましたが、その点についても私、今携わろうとしているところなんです。自治会の公民館を借りて、2歳以下、幼稚園に行かない子どもさんたちを集めて、それこそ、今、野澤先生おっしゃってくれたように、地域の婦人会はちょっとしんどいかもしれないけども、福祉の関係の方で、みんな同じような委員に携わっているんで、今のところ月1回しかできないであろうという中で、これから先、週に1回でも開放日ができたらいいかなというふうには今進みつつ、我々のほうではやっております。だか

ら、それも成功できるように、今から徐々に、11月ぐらいからでもやりたいかなと思っています。

○大方委員長 ありがとうございます。

○伊藤委員 幼児教育というところから一番近いところに、まだ子どもは小学生なので、要るんじゃないかなと思って、お話を聞いたときに、私、まだもう一人、子どもがいた場合なんですけど、これだけの条件とオプションがあれば、やっぱりそっちに行ってしまうと思います。

ただ、それが本当に何かニーズというだけの話であって、内容とか中身についてということであれば、バスで行くことがいいのかどうかとか心の教育をしているかどうかとか、どちらかといえば、公立の幼稚園のほうが、私を感じるのは、ベテランの先生が多いんじゃないかと、そういうところで私立は若い先生が多いのかなということ、「あなた、育てたことあるの」というような先生も勤めている中なので、そのいいところ、悪いところも。

ただ、野澤先生おっしゃったみたいに、地域、それに対して母親というか、保護者がそれについてきていないんじゃないかというのを、今、うちの子どもは1年生なんですけれど、やっぱり1年生ぐらいのお母さんと年齢差、ギャップを非常に感じてしまいます。何を考えているのかわからないみたいなのがやっぱり出てくるので、これは常識じゃないのと私が思うことが常識じゃなかったりする中で、地域の方に見ていただくということはもちろんすごくいいことなだけけれども、そこが、結局は「園が見てくれんねん。英語もやってくれんねん。体操もやってくれんねん。だから、行くねん。お弁当やねん。お弁当つくらんでええねん」というところに、どうしても傾斜していつている。基本的に保護者にも問題があるんじゃないかなというふうには感じます。

だから、周りで一生懸命やろ、やろ、地域で子どもを守っていこうという、たくさんあるんですけども、ただ、実際、見回り活動ももちろんしていただいているけど、じゃ、実際「本当にお母さん見てるんですか。見守り活動してますか」と聞いたら、やっぱり出ていないことが多いんで、本当に小さいときからの幼児教育や家庭教育だと私も思うんですけども、そのところがだんだんとほころびてきているんだなと思います。だから、そこをうまく伝えるということが一番大事なことになるのかなと。お母さんや保護者の方に幼児教育あり方ということに対してわかっていただくことが一番大事なのかなと。

○大方委員長 ありがとうございます。

じゃ、どうぞ。

○青木委員 たくさん資料をいただいて、そうかなという気持ちで私なりに一生懸命見て考え

たんですけども、この資料を見ている限りでは、とても前向きさが見えなかったというのがすごく残念だったというのが、前回も同じようなことを言ったかもしれないんですけども、この委員会の名前が高石市の幼児教育のあり方を検討しようというすごく前向きな委員会の名前であるにもかかわらず、いただいている資料というのが、子どもは減っています、市は財政難です、でも公立はすごく減ってしまいました、逆に私立に行かせているご家庭が多いんですという、何かすごく高石市の幼児教育というよりも、何か本当にあり方を考えくださるための資料なのかなというような、とりあえず、実際、現実なのかもしれないんですけども、この資料を見ると、公立なくなるかもというすごく危機感を持ってこの委員会に臨んだというのがあったんですね。でも、きょう、先生方のお話をお伺いして、地域の保育が大切だというすごくすてきな話をお伺いして、ちょっと安心感を持ったところがあるんですね。

私が一保護者として実際に公立幼稚園に2人の子どもを通わせまして感じたことというのは、直接、園に送り迎えですとか行事ですとか、実際、保護者が出ることって本当に、私立に比べたら、ものすごくたくさんあって、それは「あって、大変だね」、私立の保護者の方からすると、「しょっちゅう幼稚園に行って、大変よね、公立って」というふうに言われることもあるんですけども、それは個人のとらえ方であって、大変ととらえられる方は私立を選んでいらっしゃるのかなというふうに思うんです。

私は大変というよりも、実際、園にこうやって直接かかわることができるんで、幼稚園での子どもの様子も、子どもからの話だけではわからないことっていっぱい、まだ幼稚園児なんで、伝え切れないところをどこまで読み切れるかというのがすごく不安であるんですけども、公立だと、実際、毎日送り迎えしていることによって、園児たち、お友達の顔も見えるし、お友達の保護者の皆さんも毎日顔を合わせられますし、先生方とも毎日顔を合わせられるんで、すごく安心して、子どもが自分の手元を離れて、どういうふうに過ごしているのかというのがとてもよくわかるというのが、すごく公立のよさだなと思って、私は大変だとは思っていないんですね。

それによって相談もすごくしやすいというのがありまして、子育てにしろ、みんな同年代の子どもさんを持っているんで、共通の話題で、悩み事も共通だったりするんで、とても親身になって答えていただいたり、逆に、上にご兄弟がいらっしゃるお母さん方は「私も、お兄ちゃんときはこうやったよ」というのがすごく的確な、本当に実際に子育てをされてきた先輩としての的確なアドバイスがいわゆる子育て支援ということも兼ねているんじゃないかなと思うんですね。わざわざサークル活動とかに入らなくても、下に小さな子どもさんを抱えていて、

下の子の相談も乗ってもらえるし、すごくそれはあるかなと思って、公立のいいところだなと思います。

また、高石市は校区内に1園、清高さんは違うかもしれないんですけども、1校区に1園あるので、学校ともすごく親近感があります。実際、羽衣幼稚園は本当に隣接しているんで、学校の様子がすごくよくわかるんで、子どもたちも、あそこに行くんだなというのが、すごく親しみを持って、疑問をもたずに学校、みんなも行く、またその通学も幼稚園に通学してきて、ちょっと足を延ばして、今度はこっちの学校に行くんだなという感じで、通学も不安なく、いつも見なれた道を1年生から歩くことができるというのは親にとっても子どもにとってもとても安心だということだと思って。

保育に関しては確かに私立の幼稚園はすごくいろんなことをされていて、大変それは魅力やとは思いますが、私は幼稚園にはそういうのは望んでないので、本当に保育、純粋に保育、幼児教育というのを、子どもの心を育ててほしいというのを望んでいて、それにプラスアルファの英語ですとか体操ですとか、いろいろありますけれども、それは別に幼稚園でもらなくても、おけいごととして選択して、私は、この子はそれが合うかもしれない、この子は今これに興味を持っているから、じゃ、やらせてあげようということで、みんな一緒にやりましょうでなくてもいいと思っているので、逆に、たくさんオプションがついている私立は私にとってはちょっと困るカリキュラムだなというのがありました。

すみません、長くて。

○大方委員長 きょうの議論に戻っていただけたらありがたいんですけど。

○古川委員 問題や障害がある子どもたちを支援しながら、やはり前になってPRということは本当にしていないので、なかなか中身がわかっていただけないのはやはり私たちの責任かなとも思っています。公立はそこを頑張ることで高石市の保育の底上げをすることで、私立の底上げになっていくのではないかと、それで公立保育所は、幼稚園も、内容にすれば、高石市として全体の幼児教育の底上げができるのかということが本来のここの検討の内容なんだと思いますし、こういうところで、検討委員会で話をするのはすごく緊張するので、本当ならば、もっとディスカッションできる場があればよかったかなと思っています。

○大方委員長 ありがとうございます。

さっき、数値の資料のことを言われたんですが、これは前回、前々回の中で、むしろ委員さんからの資料請求があつて、それに対して事務局のほうが一生懸命、丹念におつくりいただいている資料ですから、経過として余りバラ色ではないという数値にはなっているのは、これは

現実ですからね。別に、これを見て、何か議論してと向こうから言われたわけではないので、私から誤解のないようお願いしたいと思っています。

時間もちょっと押し迫ってきているんですけれども、きょうの議論で、また次に回さなければいけない部分もありますけれども、適正規模ということがまず議論として出てきているのは、幼児教育のあり方を考えていくときに、この少子化の中で何人くらいだったら、子どもの集団力なり心を育てていったりするときにいいのかなということがまず前提になってくると思いますので、さっき、20名ぐらい以上かなというご意見はちょうどはしているんですけれども、その辺のところ、次回に少し、申しわけないですけれども、20人ぐらいを含めて、皆さん、お知恵を持ち寄ってもらったらと思います。

適正配置については今後のことも含めて考えなければいけない部分になってくると思いますけれども、これは先ほどから公立の保護者の方も、きょう、ちょっとほっとしていただいて、よかったなと思っているんですけど、初めからこの会議はつぶす会議をしているわけじゃなくてね。ただ、ベテランの先生といっても、今、実際には少ない子どもに対して人員が分散してしまっているところも当然ありますので、先生方も各市町村ともふえているのもあるので、ある意味、研究保育なり公開保育なりリーダーシップをとって本来の幼児教育がこうあるべきだということを公立さんが先導していただくならば、今、保育所の所長さんも言ってくださったように、民もそれに連なっていく。

どちらかという、これからのあり方というのはセンターのように中心軸として公立の幼稚園さんなり保育所さんがなっていくという、総合的に、実際に、子どもの数は減っているわけですから、冒頭からずっと言ってきたように、ここで育てたいと、堺市に逃げていくんじゃないで、高石市に人が定着してもらおうように、公であろうが民であろうが、バリエーションは今の保護者のあり方ですから、やっぱり先ほどの保護者のように、公立で早く迎えに行ける方もいっしょに、行きたいんだけど、先ほどおっしゃったように、行けなくて、幼稚園に行かせたいけど、保育所になっているという方もいっしょに、いろいろそれぞれの家庭の事情はございますので、そういうことも含めて、幼稚園、保育所とか小学校との連携も含めまして、子どもをどう考えるか、幼児教育をどう考えるかというのをこの会議のもともとの目的だというふうに委員長としては思っているところです。

ですから、公立がとか私立がとか保育園がとか小学校がとか、というような自分のところだけを考えて議論してもらっては、どちらかといえば、困ってきて、高石市としての幼児教育を今後、総合的にどうらえていくのかというときに、現実的な数字というのも当然参考にせざる

を得ない部分もあるということで、委員さんから出してほしいということもあり、出てきますので、次回のときは、その辺のところをトータルに、それぞれ、私立の意見も聞き、公立の意見も聞いた上での次の機会に議論に繋げていったらいいのかなど。

きょう、まだ発言なさってない方いらっしゃいませんか、はい、お願いいたします。

○山崎委員 私は、今、大方委員長がおっしゃったことがすべてだろうと思います。要は、高石の幼児教育のあり方をどのようにしていこうかというふうなことの検討委員会ですから、その議論はできる場ではなかったかもわかりませんが、我々委員としては何らかの方向性というのは出すべきですし、出さなきゃいけない。今日の大きな議題は数値目標、数字のことはきついかもわかりませんが、どれぐらいの人数が適正なのかというようなことを問われているということだろうと思うんですけども、要は、精神論、それから、もっともつとこれを答えとしていこうということになれば、数字を出して、具体的なことへ入っていかないと、答えが出ないというのは当たり前のことですから、今、公立の先生、それから父兄の皆さん、いろんなご意見がありましたけれども、やはり高石の方向というか、高石はどうしたいのか、どうならないといけないのかというふうな事情の中も十分考えていきたい。

ただ、精神論だけを言って、あれもいい、これもいいということであれば、バラ色の道を歩いていきたいと思いますが、これがならないから、このような検討委員会をやっているんだろうと思います。そこらでよく我々は考えていかないと。今、地域の話、家庭の話、幼稚園の話、この三位一体でやっていく。そこへプラス、森先生がおっしゃった小学校も入れて、四位一体のことをやはり、高石の幼児教育の話だからということをもっともつと、数字も詳しく調べた上で具体的にもっと尊重して、いろんな形でやればいいという。

私は、この集団のあり方、公立の幼稚園、先生もおっしゃったように、やはり集団のすばらしさというのが、今、例の中でおっしゃったとおりだと思います。これが、その集団が10なのか、20なのか、35なのかということの議論になっていくだろうと思います。これは実に冷たい話かもわかりませんが、そのような話をしないといけないときだろうと思います。そのようなことをよく考えた上で、数字というのをも尊重していきたいというふうに思っています。

以上です。

○大方委員長 ありがとうございます。

事務局のほう、何かございますか。特にございませんですか。

そうしましたら、今日、きっちりとしたところまで詰められなかったんですけども、適正規模、適正配置ということも含めまして、次回のところですね。それから、3歳児の話も公立の

ほうから、きょうも再度出てきていると思うんですけども、3歳児保育を仮に今こうしてやっ  
ていくという議論があるとするならば、認定こども園という、かつてはよくないという意見も  
ございましたのですけれども、そういう形でセンター的に実験的にやっていって、その中に公  
立幼稚園の3歳児を入れていくとか、いろんなまだまだ可能性というのは探っていくこともで  
きるんじゃないかと思しますので、また次回、その辺のところを議論していきたいと思ってい  
ます。

そうしましたら、すみません、次回の会議の日程を事務局のほうでよろしくお願ひしたいん  
ですが、きょうのことを踏まえまして、次回はそういうふうには議論にいきたいと思ひます。

○事務局（野村） 事務局のほうから次回の開催の日程についてでございますが、10月9日の  
同じ場所、同じ時間で第4回目、4回以降で。

○大方委員長 よろしゅうございますか。

そうしましたら、あと5回目の日程調整のほうもあわせてお願ひしたいんですけど、事務局  
よろしくお願ひいたします。

○事務局（野村） 次々回ですね。

○大方委員長 次々回、はい、5回目ね。

○事務局（野村） それにつきましては、11月の4日か、あるいは6日を。

○事務局（野村） そしたら、できたら早いほうがいいと思ひますので、4日に開催をさせて  
いただく。6時ということでよろしくお願ひいたします。

○大方委員長 ありがとうございます。

そうしましたら、きょうのところは民間からの意見を聞くということと公立さんからの意見  
を聞いたところで終わってしまいましたが、適正規模、適正配置、それから公私の役割という  
ことと、それから幼稚園、保育所の連携ということ、先ほどのことも含めながら、また次のと  
きにも意見いただけたらと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

そうしましたら、これもちまして本日の議事を閉めさせていただきます。

皆さん、大変ご苦労さまでした。ありがとうございます。

○司会（西川） 長時間ありがとうございました。